

第10章

黒島の歴史と文化財



くろしま い ち
黒島の位置

この地域の小中学校

小中学校：黒島小中学校

だい しょう くるしま れきし ぶん かざい
第10章 黒島の歴史と文化財

カトリックの島

黒島は、相浦の港外約10キロメートルの海上にあります。周囲約12キロメートル、南北3.4キロメートル、東西6キロメートルあり、1208の島からなる九十九島のなかで最も大きな島です。

カトリック信仰の島として知られ、島の人口の約80パーセントが信徒です。相浦から1日に3便のフェリーが、本土と約50分でつないでいます。

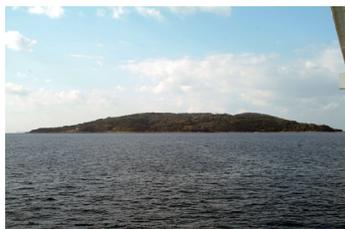
フェリーは、学校や病院、そのほかの用事で行き来する人の足であり、生活に欠かせない物や郵便なども運んで、島での生活を助けています。



フェリーくろしま

1 2002年(平成14)に「九十九島の数調査研究会」が正式に確認した。そのうち204の島が無人島。

名前の由来



船から見た黒島

黒島の名の起こりは、カトリック信仰の島であることから十字架の「クルス」からではないかともいわれていましたが、13世紀に²平戸松浦氏の領地として「黒島」と書かれていますので、その頃にはすでに「黒島」と呼ばれていたことが分かります。海から見ると、島全体が樹木におおわれて黒く見えます。その見かけの様子から「黒島」となったのかも知れません。

2 江戸時代に佐世保地方を治めていた大名の先祖。中世の武士集団として有名な松浦党の出身。

- ①黒島天主堂
- ②串ノ浜岩脈
- ③根谷のサザンカ
- ④根谷のアコウ
- ⑤長崎鼻
- ⑥黒島神社
- ⑦興禅寺、本村役所跡
- ⑧殉教墓

- ⑨寄人の墓
- ⑩信仰復活の地
- ⑪黒島砲台跡
- ⑫お告げのマリア修道会黒島修道院
- ⑬小田平墓地(カトリック共同墓地)
- ⑭仕切牧墓地

— 地区界



**くろしま ちず
 黒島の地図**

黒島の自然と歴史

島は自然が豊かに残っています。黒島神社の森は縄文時代の森の様子をよく残し、³串ノ浜岩脈では⁴地殻変動の跡を見ることができます。島の南側にある長崎鼻は、⁵東シナ海の波に削られて高い崖となっています。

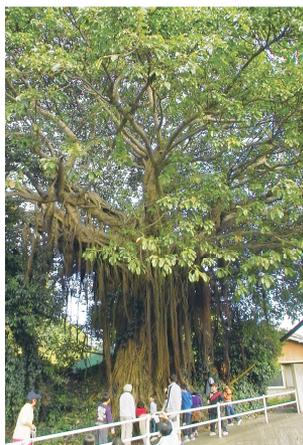
暖かい気候が幸いして、⁶亜熱帯地域の植物であるアコウの巨木が見られ、サザンカの大木もあります。このうち、根谷にあるサザンカの大木は、佐世保市の天然記念物に指定されています。



長崎鼻の断崖



根谷のサザンカ



根谷のアコウ



串ノ浜岩脈(県指定天然記念物)

- 3 今から約800万年前に岩の割れ目にマグマが入り込み、そのまま冷え固まったもの。県内で最も大きい。
- 4 地球の表面が、地球内部からかかる強い力によって動くこと。
- 5 九州と中国大陸の間にある海。東中国海ともいう。
- 6 沖縄などの琉球、南西諸島などの気候。本土よりもかなり暖かい。

14世紀頃の黒島は、平戸島南部にいた津吉氏の領地でしたが、15世紀になると平戸松浦氏の家臣だった西氏が、津吉氏に代わって黒島を領有していました。島には西常陸という武士が海賊を追い出して開拓したという昔話が伝えられていますが、島での支配者の入れ替わりが、海賊退治の昔話になったと考えられます。島の領主だった西一族の墓は本村の興禅寺にあります。



西一族の墓

江戸時代の黒島は、長い間馬の放牧場として使われていましたが、江戸時代の終わりに放牧場が廃止されると、多くの人に移り住み、開拓が進められました。



黒島神社

江戸時代には、平戸島との結びつきが強く、平戸島の南部にあった津吉村の一部でした。そのため、黒島漁港(白馬港)を見下ろす丘にある「黒島神社」は、津吉の志々伎神社の分社であり、本村の興禅寺も津吉の長泉寺の末寺となっていました。

- 7 本社(ここでは志々伎神社)の神様の分身を別の土地に祀った神社。
8 本寺(ここでは長泉寺)に所属し、その支配を受けるお寺。

カトリックと黒島

日本にカトリックが伝わったのは、宣教師フランシスコ・ザビエルが16世紀半ばに鹿児島に上陸して伝道(キリストの教えを伝え、広めること)したのが始まりです。その後、平戸にも立ち寄っていますが、その頃はまだ黒島にカトリック信徒はいませんでした。

カトリック信徒は全国に数多くいましたが、16世紀末の豊臣秀吉による弾圧に始まり、江戸時代は幕府により厳しく禁止されました。信徒は「キリシタン(切支丹)」と呼ばれ、カトリック信徒であることが知られると、拷問によりキリスト教を棄てることを迫られ、それを拒むと磔や火炙りなど、⁹残酷な方法で処刑されました。

そのため、信徒は潜伏してしまい、表向きは仏教や神道の信徒を装って、カトリックの信仰を守り続けました。そのような人々を「潜伏キリシタン」と呼びます。

- 9 役人たちは、「転ばせる(改宗させる)ためには苦しめよ」と命令を受け、熱湯や冷水を浴びせたり、耳を切り取ったり想像を絶するような拷問を繰り返した。

年に一度、人々は戸籍を確かめるときに絵踏を強いられました。キリストやマリアの像や絵を踏ませ、信徒でないことを確かめるのです。黒島でも、本村にあった平戸藩の役所で絵踏が行われていました。

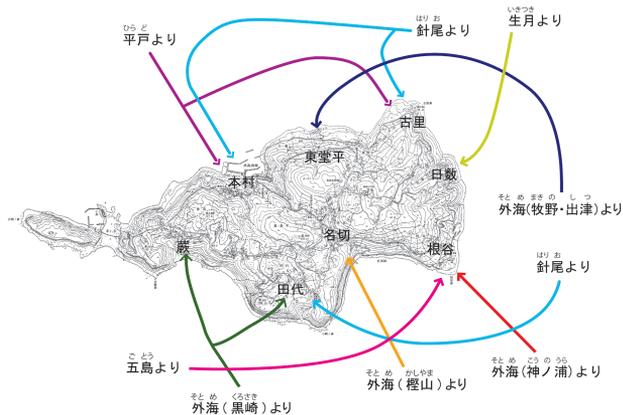


本村役所跡

それでも信徒は潜伏を続けました。あまりに潜伏年月が長いために、カトリックの儀式や祈りの言葉が変化してしまい、¹⁰かくれキリシタンとなった人たちもいます。

10 長く潜伏していたため、儀式や教義、祈りの言葉が変化して民間の信仰と結びつき、独特の宗教となってしまうもの。明治以降もカトリックとして復活せず、生月や平戸などに現存している。これに対して、明治以降にカトリックとして復活した人々を「潜伏キリシタン」と呼んで区別している。

黒島にカトリック信徒が住むようになったのは意外に遅く、江戸時代後期の1785年(天明5)頃のことでした。この頃、平戸藩が黒島を開拓するため、他の藩から農民を移住させたといわれています。さらに黒島にあった放牧場を廃止し、農民の移住を許しました。こうして黒島に移住した人たちの中に、西彼杵半島の外海地方や平戸の生月島にいた潜伏キリシタンたちがいたのです。



黒島に移り住んできた人たちの出身地

江戸時代の初めから島に住む人たちは、平地が多く住みやすい本村と古里に集落を作っていました。そのため、後から島に入ってきた信徒たちには、生活しにくい場所しかありませんでした。東堂平、日数、根谷、名切、田代、蕨は潜伏キリシタンの人たちが作った集落です。潜伏キリシタンの人たちは、信仰を守るためにわざと生活しにくい不便なところを選んだともいわれています。一方で、元々島に住んでいた人たちは、移住してきた人たちが潜伏キリシタンであることを薄々知っていたといわれています。知りながら、そのことには触れず、磯漁の解禁日を共有するなど、島という環境の中で、共に生活していたのです。

移り住んできた人々と、元々住んでいた人々は、それぞれ独自に集落を作っていました。そのため墓地も各集落に作られていましたが、潜伏キリシタンの人たちの集落にある墓地にも、仏教式の石塔が建てられています。これは、潜伏キリシタンの人たちが、仏教徒を装っていたことを裏付けるものです。明治時代になって、信仰の自由が認められると、これらの墓地にもカトリック様式のお墓が建てられるようになりました。そして、名切に教会が建てられると、現在の共同墓地が作られ、お墓はそちらに建てられるようになりました。



仏教の墓とカトリックの墓が混在する
仕切牧墓地(蔵地区)

黒島郵便局の裏山に「殉教墓」と呼ばれている墓があります。丸い石を積んだ1辺2メートルの大きな墓です。しかし、黒島で殉教(宗教を守って死ぬこと)はあっていませんので、伝染病で死んだ人か、流れ着いた死体を集団で埋葬した墓かもしれません。

島ということから、船が遭難して死者が流れ着くこともあったようです。それは「寄人」と呼ばれ根谷集落の道端にある4つの墓に葬られています。



殉教墓



寄人の墓

コラム～潜伏キリシタンとサザンカ～



サザンカの花

黒島にはいたるところにサザンカの木があり、毎年冬には赤や白のきれいな花が咲く。黒島にサザンカが多いのは、島の歴史と深く関係している。移住してきた潜伏キリシタンは、やせた土地に住まねばならなかった。そこで、生活の足しにしようとサザンカを植えた。種から取れる油は、貴重な食用油として彼らの生活の一部を支えた。その役目を終えた今、サザンカはその花によって島を訪れる人の目を楽しませている。

信仰の復活

江戸時代の終わり頃の1864年(元治元)、長崎に外国人のための教会が建てられました。国宝の大浦天主堂です。教会ができると、潜伏していたカトリック信徒は続々と教会を訪れ、信徒であることを神父に打ち明けました。



信仰復活の碑

まだ厳しい禁教令(キリスト教を禁止する法律)が敷かれていた時ですから、¹¹命がけでした。黒島の出口大吉親子も長崎まで出かけ、信徒であることを告げたのです。そして長崎で¹²洗礼を受けた黒島の信徒たちは、1869年(明治2)暮れまでに40人ほどに増えていました。中でも出口大吉は神父の指導を受けて¹³伝道師となり、黒島の信徒のほとんどに洗礼を授けました。

次に出口大吉はひそかに神父の黒島への来訪を計画しました。この計画は禁教令が解かれる直前の1872年(明治5)に実現し、黒島に初めての神父が上陸しました。

11 この頃、日本最後の大弾圧事件*「浦上四番崩れ」が起こっており、多くの殉教者を出している。出口親子の行動はまさに命がけだった。

- 12 キリスト教で信者となるための儀式。この儀式で正式に信徒として認められ、キリスト教徒としての名前「洗礼名」を授けられる。出口大吉は「ジワン」を名乗った。
- 13 キリストの教えを伝え、広める人。出口大吉は「平戸の使徒」と呼ばれた。
- ※ 浦上四番崩れ…1869年(明治2)、明治政府が浦上(長崎市)のカトリック信者3,400名を、西日本各地の取谷所に監禁して拷問・弾圧を加えた事件。1873年(明治6)の禁教令が解かれた後、浦上に帰ってきたのは1,900名に過ぎなかった。このような弾圧事件を「崩れ」と呼び、浦上で4回目だったため「浦上四番崩れ」という。

このとき島を訪れたのが、長崎で多くの黒島の信徒に洗礼を授けていたポアリエ神父でした。神父は1872年から1878年(明治11)の間に何度か島に来て、出口家で¹⁴ミサを捧げました。ポアリエ神父が黒島でミサを捧げたことによって、黒島の潜伏キリシタンはカトリックとして完全に復活を遂げたといえるでしょう。そして、神父がミサを捧げた出口家の跡が信仰復活の地として黒島の信徒たちに大切にされています。



ポアリエ神父の上陸

イラスト: 木寺十郎

- 14 カトリック教会でおこなわれる儀式の一つ。キリストの体を象徴するパンと、キリストの血を象徴する葡萄酒を神に捧げる。司祭が執り行い、信徒が参加する儀式の中でもっとも重要なもの。



くろしまのシンボル「くろしまてんしゅどう」
黒島のシンボル「黒島天主堂」

外観はロマネスク様式（11～12世紀の西ヨーロッパで流行した様式）で、美しいステンドグラスの窓が付いています。内部の祭壇部分には有田焼のタイルが敷かれ、¹⁵アンジェラスの鐘やキリスト像、ステンドグラスはフランス製です。天主堂内にはマルマン神父手作りの¹⁶説教壇も残っています。最初、床は板張り、冬になると畳が敷かれていましたが、1991年（平成3）に現在の長椅子に改められました。

明治時代のレンガ造教会堂としては規模が大きく、完成度が高いことから、その後の教会堂建設の模範となっています。建設当時の姿が良く保存されており、全国的に貴重であることから、1998年（平成10）に国の¹⁷重要文化財に指定されました。

15 祈りの時間を知らせる鐘。戦争中は空襲警報の鐘として使われたため、供出をまぬがれた。

16 説教壇は大変珍しく、全国でも3台しか残っていない。

17 教会建築としては大浦天主堂について2例目の指定となった。

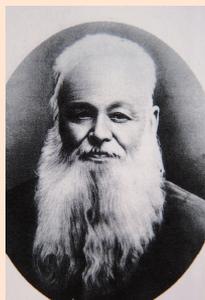
1873年（明治6）に禁教令が解かれ、信徒は自由に宗教活動ができるようになりました。

1878年（明治11）にはペルー神父が来て、その2年後に名切に最初の木造教会堂が完成しました。さらに、1897年（明治30）にはフランス人マルマン神父が来島して、本格的なレンガ造教会堂の建設が始まりました。黒島のシンボル、黒島天主堂です。40万個ものレンガが使われており、信徒の献金と労働奉仕により1902年（明治35）に完成しました。



くろまかいらいふ
教会内部の様子

コラム～マルマン神父と黒島天主堂～



マルマン神父

ヨセフ・フェルディナンド・マルマン(1849～1912)は1849年3月26日、フランスで生まれた。パリ外国宣教会に所属し、1877年(明治10)に来日した。最初は五島の堂崎で布教・福祉活動を行い、ついで1892年(明治25)に伊王島に赴任し、そこから琉球諸島にまで出向いて布教活動を行った。そして、1897年(明治30)に黒島の主任司祭として島を訪れた。

彼は情熱と才能あふれる人物で、天主堂の設計から、資金集め、工事監督をこなし、さらには祭壇の装飾を自ら彫刻し、説教壇も作った。神父と信徒の懸命な努力の末、5年後の1902年(明治35)天主堂は完成した。

完成後も神父は島に残り、それから10年後の1912年(大正元)8月23日、「私が逝くとき、靈魂に天の栄光がたまわるようとり行かせたまえ」との言葉を残し、その信仰に捧げた一生を終え、黒島の土となった。彼の墓は復活の記念碑や天主堂と共に、黒島カトリック教徒の宝となっている。

くろしま ぶんかてきけいかん
黒島の文化的景観

黒島に古くから住んでいた人々、そして、江戸時代に移り住んできた人々は、島を開拓して家建て、農地を広げながら暮らしていました。黒島南部の蕨や田代、北部の東堂平といった地区では、移住してきた人々が、島を開拓していった経過を風景として見る事が出来ます。

このように、人々の長い間の生活によって生み出された風景のことを、「文化的景観」と呼びます。これは黒島だけに残されているものではありませんが、黒島では特に古くからの土地利用の様子が良く残っています。



蕨地区に残る土地利用の様子

左の写真は、蕨地区の様子ですが、海から上がった場所に防風林に囲まれた家建て、その背後の斜面を畑として開墾していった様子がわかります。畑にも背の低い防風林が植えられています。蕨地区は特に南風や西日が強いので、多くの家で風に強く、横に広がる性質をもつアコウの木が防風、遮光のために家の南側に植えられていま

す。そのため、家の石垣を包み込むように大きく成長したアコウの木を見ることができます。

そして、島の開拓が進んで人口が増えると、島内で燃料(薪や炭)を得ることが難しくなり、隣接する無人島の伊島や幸ノ小島がその採集地となっていました。また幸ノ小島周辺の浅瀬では、肥料に使うための海藻も採取されていました。

このように、周辺の島の利用や、海から島の内部に向けて進められた開拓、アコウの木や石垣によって作られた集落の風景が、全国的にも珍しいことから、2011年(平成23)9月に、黒島全体と、伊島、幸ノ小島が「佐世保市黒島の文化的景観」として、国の重要文化的景観に選ばれました。



アコウの防風林

明治以降の黒島

明治時代になっても黒島は平戸津吉村の一部に含まれていました。それが独立して「黒島村」となったのは1885年(明治18)のことです。

大正時代になると、佐世保軍港を守るために、黒島にも砲台や探照灯(サーチライト)、発電所が造られ、太平洋戦争前には、番岳山頂に18高射砲台も造られました。これらの砲台は終戦と同時に廃止されましたが、現在でも番岳や古里などにその跡が残っています。



古里の砲台跡

砲台自体はあまり戦いの役に立ちませんでしたが、このとき造られた発電所は、戦後、島民の生活に電気を供給し、大いに役に立ちました。

18 飛行機を迎え撃つための大砲。番岳山頂に2門設置された。

1954年(昭和29)に佐世保市の一部となり、現在に至っています。

島の人口は、1950年(昭和25)の2,371人をピークとして減り続け、今では約500人しかいません。しかし近年、黒島の豊かな自然と文化財を活かした黒島地区史跡保存会のボランティアガイドが人気を呼び、島を訪れる人が増えています。

昔ばなし～伊島のヘビ松～

黒島の北に2つの無人島があります。その西側の島が伊島という島で、そこには今は枯れてしまいましたが、「ヘビ松」と呼ばれる松がありました。その「ヘビ松」にまつわる悲しい昔ばなしが黒島に伝わっています。



黒島からみた伊島

もう300年以上も昔のこと、平戸の殿様の娘、きよ姫様が、不貞をはたらいて子供を身ごもった罪を問われて、島流しにされてしまいました。伊島に流れついた姫は、子供を産み落とされたものの、島には水がなく、親子ともどもそのまま息絶えてしまいました。そして程なく、姫が死んだ場所に小さな松と、その周りをまるで蛇がとりまいているように見える松が生えてきました。この2本の松が子と親にみたくてられて、「ヘビ松」と呼ばれるようになりました。親松の幹は、根元から先まで太さが変わらず、樹皮は蛇のうろこそっくりだったそうです。黒島に住むお年寄りのなかには、この松を実際に見た人がおり、みんな口をそろえて奇妙な松だったと言います。

このようないわれのもとに、島の仏教徒はヘビ松を安産の神様として祀り、安産祈願のために伊島にお参りに行く人も多かったそうです。しかし、次第に忘れ去られ、今では島を訪れる人はいなくなっていました。

昔ばなし～本村のカッパ塚～

黒島港から本村集落に上る途中の田んぼの中に「カッパ塚」と呼ばれる大きな石があります。このカッパ塚には次のような昔ばなしが伝わっています。

昔々、黒島にはいたずらカッパがいて、島の人を困らせていました。ある日、本村の人が田んぼを見に行ってみると、なんと田んぼの中にカッパがいるではありませんか。そこでその人は一計を案じ、カッパに声をかけました。「おいカッパどん、カッパどん、相撲とろうかい」カッパも「よしきた」と答え、相撲をとることになりました。するとこの人は家から灰を持ってきて、「塩はもったいなかけん、灰ばまこう」といい、わざとカッパの頭にかかるように灰をまきました。そして「はつけよい！」と相撲をとり始めたところ、なんとカッパは負けてしまいました。実はカッパの頭にある皿の水が灰に吸い取られてしまっていて、力が出なかったからでした。

この人はカッパを捕まえると、田んぼの真ん中にある大きな石の前まで連れて行き、「この石が腐るまでいたずらせんって約束すぎ放してやる」といい、カッパはそのとおりの約束し、証文の代わりに石の上に石塚を建てました。カッパは石が腐らないことを知らなかったのでしょうか。それ以来カッパのいたずらはぱったりとやんだそうです。



本村にあるカッパ塚

コラム～長崎から世界遺産を！「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の挑戦～

現在長崎県や佐世保市では黒島天主堂を含む県内外14ヶ所（平成28年2月現在）の教会や史跡をひとまとまりとして、世界文化遺産への登録を目指している。この「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は「日本」という独自に発展した文化を持つ国に、海外からキリスト教がもたらされたことによって起こった文化の交流や、厳しい弾圧を受けて潜伏し、信者の力だけで250年もの間教えを守り続け、「東洋の奇跡」とも呼ばれた劇的な「信徒発見」を経て復活を遂げたという、日本におけるキリスト教の伝播と受容の歴史を示す世界的に貴重な例として評価されている。2007年（平成19）には世界遺産暫定一覧表にも記載され、世界遺産登録への第一歩を記した。今後はさらに調査や研究を進める必要があるが、「黒島の宝」が「世界の宝」となる日もそう遠くないかもしれない。

地域の年表

年代	出来事
旧石器・縄文時代 鎌倉時代 1271年（文永8）	蕨や田代、名切などで狩猟が行われていた。 平戸松浦家の祖、峯湛の領地となる。
戦国時代 1573年頃	西常陸が海賊を討伐して移住（伝）。
江戸時代 1785年（天明5） 1797年（寛政9） 1803年（享和3） 1865年（慶応元）	平戸藩が黒島の開拓に着手し、大村藩、佐賀藩から農民が移住する。 外海地方の潜伏キリシタンが五島に移住開始。その一部が黒島に上陸。 平戸藩の放牧場が廃止される。本村に興禅寺が創建される。 出口親子他20名が長崎に出かけ、信仰を告白。
近代 1872年（明治5） 1880年（明治13） 1885年（明治18） 1897年（明治30） 1902年（明治35）	ポアリエ神父来島。黒島で初めてのミサが行われた。 ペルー神父が名切に初めての教会を建てる。 津吉村より独立し、黒島村となる。 マルマン神父来島。黒島天主堂着工。 黒島天主堂竣工。
現代 1954年（昭和29） 1998年（平成10） 2007年（平成19） 2011年（平成23）	佐世保市黒島免となる。（のち黒島町） 黒島天主堂が国指定重要文化財となる。 黒島天主堂を含む「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が世界遺産暫定一覧表に記載される。 黒島と伊島、幸ノ小島が国の重要文化的景観に選定される。